

はじめての

# 万葉集

日本に現存する  
最古の和歌集「万葉集」を  
わかりやすくご紹介します

vol.114

## 夜明けの秋風

この歌は秋の雑歌に収められている、「安貴王の歌」と題された一首です。安貴王は志貴皇子の孫で、天智天皇の曾孫にあたります。『万葉集』に四首の歌が残されており、この歌以外の三首は特定の女性に向けて詠まれた歌です。

今回の歌には「妹」など恋人を示す語は含まれないものの、「手本」「寒しも」はいずれも恋の歌に用いられる言葉です。手本は「まく(枕にする)」という例が多く、腕枕の描写に用いられることと呼应して用いられる語です。今回の歌が雑歌に収められているのは、夜明けの秋風の涼しさに主眼があるためとみられますが、歌を詠んだ背景には恋人の不在があったのかもしれない。さて、安貴王をめぐっては、『万葉集』

秋立ちて幾日もあらねば  
この寝ぬる朝明の風は手本寒しも

安貴王 卷八(二五五五番歌)

秋になつてまだ何日もたつていないので、こうして寝ている床の夜明けの風は、手本に寒々と感ぜられるよ。

二人の女性が記されています。一人は紀女郎で「鹿人大夫の女、名を小鹿」といへり。安貴王の妻なり」との注が題詞にあります(巻四・六四三番歌)。安貴王の「伊勢の海の沖つ白波花にも包みて妹が家つとにせむ(伊勢の海の沖の白波は花であつてほしい。包んで妹のみやげにしよう。／巻三・三〇六番歌)」に詠まれている「妹(妻)は、紀女郎のことと考えられています。

もう一人の女性が八上采女です。相聞の歌ばかりを収めた巻四に安貴王唯一の長歌・反歌があります。左注に、因幡の八上采女を妻として愛する気持ち盛んだつたが、勅命によって不敬罪が定まり、故郷に退却させられたので、悲しみのあまり歌を作つた、とあります。その時の歌「敷たへの手枕まか

ず間置きて年を経にける逢はなく思へば(五三五番歌)では、手枕を交わさず



(本文 万葉文化館 阪口由佳)

## 万葉ちゃん つぶやき

和歌や作者などに  
関連するものを  
紹介するよ!



万葉ちゃん

## 奈良豆比古神社の翁舞

翁舞は毎年10月8日に行われている、奈良市の代表的な伝統行事です。奈良時代に春日王の病氣平癒祈願のため、2人の皇子が舞を奉納したのが始まりとされていますが、そのうちの1人が安貴王でした。翁舞は猿楽(能)のルーツといわれており、大和各地の祭祀行事で奉納されてきました。中でも奈良豆比古神社には古い形が残されており、国の重要無形民俗文化財にも指定されています。



撮影:野本暉房

奈良県文化財保存課  
☎0742-27-8124